

第1回 磐田市特別支援連携協議会 会議録

[日 時] 平成 22 年 5 月 26 日(水) 14:00～16:00

[場 所] 磐田市豊田支所 303 会議室

[出席者] 委員 11 名・事務局 8 名（教育長、学校教育課長、子育て支援課 1 名、教育委員会 5 名）

- 1 開会
- 2 連絡協議会医員委嘱状交付
- 3 教育長あいさつ

乳幼児期からの療育、就学、卒業後の就職など幼児・児童生徒へ一貫した具体的支援を行うために、保健医療福祉それぞれの専門的な立場から御意見をいただきたい。

特別支援学級の拠点校化を打ち出し、平成 23 年入学生から始めていく。拠点校化を進めながらも、磐田市の独自の教育を考えたい。

- 4 委員・事務局自己紹介

学識経験者>

学力不振児、高機能自閉症、環境要因による ADHD 児など診断にこだわらず、当面・将来、支援が必要な子に対して支援が必要。

県福祉関係>

虐待の最前線であり相談件数 1,774 件。虐待は 10.6%（114 件）ではあるが、ケースワーカー、心理士、保健師などが協力し、対応しなければいけない。

虐待の中には障害などによる子育て困難感が不適切な対応をしてしまうことが発端となることもある。実際に保護する子どもは少なく、ほとんどの子が家庭の中にいるので、そこにどのように関わっていくか。地域の関係者の協力が必要。

医療関係>

3 月 1 日に周産期センターがオープン。平成 9 年に比べて、出産は 200 件から 1250 件まで増えた。発達障害は母子の出会いの場から始まっており、その出産をよりよい環境にしたい。センターに臨床心理士を配置し、障害をもって生まれた子の親、産後うつなどに対応している。

市福祉関係>

30 年前の福祉事務所は 3 係(社会・保護・児童)であったが、現在は 4 課になっており、福祉の広がりを感じている。それが住民のニーズでもある。

市保健関係>

母子保健係ではすべての子どもとのかかわりがある。発達障害の子をどのように追跡していくかについて現在少しずつ整理している。

子ども達の成長に伴って、関係機関はかわっていく。一生を考えて、自分のエリアだけにとどまらず、子どもを中心に置いて、各機関をつないでいく必要がある。

保護者代表>

乳幼児から就職まで一貫した支援ということで菊川市でサポートブックを運営している。子ども達の育暦や課題をつないでいくために使用していく。

発達障害の子どもは支援なくしては生活できないので、周りのサポートが必要。

7月から重症心身障害者を大藤学園で受け入れが始まる。重度の子が通える施設があまりないのが現状。

特別支援学校関係者>

平成2年設立当初は約180名が現在は355名。200名を定員目安につくったのでハード面ではオーバーしているが、教職員の努力で教育の質を落とさないようにしている。分校もできたが、本校の生徒数は減らない。

特別支援学校関係者>

県立磐田学園に併設し32年目。通学生はいないため地域とのつながりがもちにくい。昨年は、小学校へ特別支援教育について、出向いて話をした。

学校代表>

保護者支援・家族支援が必要。家族面談に父親を呼び出すと言うのが今年度の目標。

特別支援コーディネーターが力を発揮することで学校全体に影響があり、存在の大きさを感じる。

幼稚園代表>

支援の必要な子については保護者との関係が大切。そのためには職員が心を開いて接することが必要。保護者が子どもに対して心配になった時、職員がアドバイスし、幼稚園・家庭でそれぞれできることを確認する。

保育園代表>

一時保育制度の中で小集団の中でみるというものを4~5年前に立ち上げた。統合保育を掲げており、いろいろな子が入園している。特別支援という点で、個別指導計画を立てて、取り組んでいる。

5 会長・副会長選出

6 会長あいさつ

7 協議

(1)「小中学校特別支援学級の拠点校化に向けて」

事務局>

教育委員会でも大きな課題となっているのが拠点校化。多方面からご意見をいただき知恵を出し合って、よりよい拠点校化をめざしたい。

委員>

就学指導が難しくなり、明らかな対象者でも地域の子とも交流を望み、支援学級を選んでくるだろう。拠点校化により地元以外の学校に通うことが多くなると思うと地域との

交流ができなくなるだろう。それを保護者等に理解してもらえるのか。

事務局>

交流については、どういった方法がいいのか、これから検討していく。

掛川市は復籍制度を取り入れている。拠点校・地元校の両方に籍を置き、行事に参加できるように考えているよう。これが磐田市でも採用できるのか検討したい。

委員長>

将来を見据えて集団生活、学校生活での習慣を身に付けたり、子どもの能力を伸ばすような教育を受けることが拠点校で受けられることを保護者に説明する。親のニーズも含めて、きちんとした教育を保障することが第一に必要。距離の問題は教育の問題ではない。

拠点校でも通常学級児との交流は保障されるのであれば、その中で大人が教えるより大切なことを学び合うことができる。また、同時に保護者同士の交流も重要。

事務局>

現在も生活習慣を身につけ、本人の能力を伸ばすように、教育している。拠点校化により指導者が絞られることで支援学級のエキスパートをつくっていききたい。

ひとりひとりの能力を伸ばしていく教育ができればいいと思うが、ことばで言うほど簡単ではない。エキスパートを育てるには時間もかかると思う。

委員長>

限られた期間の中で教育していくので、その中でどれだけの成果を発揮するか。もてる能力を最大限に発揮できるために、教育に差があってはならない。

事務局>

今回の拠点校化をきっかけに教育を見直すことができると思う。

集団化することによるメリットを取り入れ、個に応じた対応で、家庭から社会へつなげていく教育をしていく。

通常学級と特別支援学級の交流についても、全ての子が適応できるわけではない。個の特性に応じて行っている。子どもの実情により学校での教育も違いがある。

委員長>

集団に入れることがよくない場合は、個で対応するような個別支援計画が拠点校であれば可能というプログラムを提示すれば教室の場所は問題ではない。

委員>

子どもの将来を考えたとき、この土地で生活するために、みんなで支えてもらう必要があるので地元の学校を選びたいと思う。拠点校化の極めたのが特別支援学校であるが、共生・地域へと言われているなかで拠点校化とは逆の考え方。

健常児・障害児を比べると、障害児を育てるほうが体力・能力が必要。

教育の基礎は障害児の教育といわれており、障害児を育てられる先生はどんな子でも教育できる。

市行政の許容範囲の中で利便性、経済的問題を考えたとき、ある環境条件の中でソフト

面を考えていくかが必要。先生が道を示して、親に安心感を与えてくれれば拠点校化の問題はクリアできるのではないか。

委員＞

保護者が障害のレベルなども含め、個に合った教育の質をみたとき、選んで通学してきている。子どもの力を伸ばすような教育の質を高めるのが課題。

地元の校への入学が叶わなかった場合は保護者の努力で子ども会活動や学校行事に参加してもらい、地元との交流を図る。医療的ケアの関係で願っても参加できない場合もある。

個別支援計画は通常学級の子にも必要な計画。

委員＞

拠点校化で心配なことは支援学級か通常学級か迷う親が地元校を選ぶとなれば、通常学級の担任は大変だろう。拠点校化の良さをきちんと説明し、親に納得してもらわないと現場の教師への負担は増える。親の選択は、子どもにとって一番良いものであるはず。

委員＞

親は子どもの成長を求めている。それがはっきり表れれば、多少の犠牲・負担を惜しまないだろう。(教員の)チーム指導も特別支援教育では大切なこと。

委員＞

支援学校との教員交流を盛んにするなど、支援学校から支援学級へアドバイスしてほしい。指導に携わる教員もよりよい教育をめざし、悩みがある。初級・中級の特別支援教育の研修も充実させ、教育委員会としても今後人材育成を考えたい。

今年度、教育委員会では小中学校の現場をまわり、現状把握をしている。

教育長＞

複数人で社会性を育てることは経験上確かなこと。子どもを入れたいと思えるクラスをつくるのが目標。

普通学級にいる支援の必要な子のために非常勤職員を配置してもらうなど、今後いい学級づくりと、支援学級に行けない子への保障を考えていく。

委員＞

拠点校化するのであれば、定数の改善を強く望む。

(2)「個別の教育支援計画及び指導計画の活用について」

委員＞

菊川市のサポートブックは個別支援計画よりもう少し細かく、用紙をひとつのファイルに入れていく。子どもを伸ばしていくための親の思いや医療機関の判断などが入ったベースの情報でつないでいく必要がある。

委員＞

はあとでもサポートブックに似たようなものをつくり始めている。利用できるものであれば、情報提供していきたい。

(3) 「特別支援教育の地域化について」

事務局>

乳児、幼稚園・保育園、小中学校、卒業後の連携についての課題について御意見を申し上げます。

委員>

健診等でチェックをかけているが、発達上の問題があるのか、発達段階の一環で一時的な問題なのか見極めるためには・・・課題山積。

細かな記録を整理し、個人情報だが子どもにとって必要なことは次へつなげていけるように検討している。逆に、将来的な様子をフィードバックし、健診等に活かしていきたい。

委員長>

3歳児健診でのフォロー児を5歳で再調査すると改善していることがある。そのような統計を3歳児健診へフィードバックしていけば健診の精度があがる。

副委員長>

保護者の希望があり、保健師による幼稚園へ情報提供や訪問などがある。そういった情報はとてもありがたい。

8 その他

9 閉会